

リレー
橋友録

私の橋歴書

(676)



私がなぜ橋の設計を仕事に選び、コンサルタントに就職したかは、お二人の先生を抜きには語れない。先生とは、東原紘道先生と故田島二郎先生である。もちろん、私自身子供の頃から工作好きであったことが、今の職業を選んだことに影響している部分もある。

しかし、橋の設計を仕事にするなど考えたことは無く、誰もが憧れるように外科医になりたかったし、田宮二郎のドラマ「白い滑走路」を見てはジャンボジェット機の機長にも強く憧れた。大学進路決定においても、当時楢岡球と女の子に夢中だった私は、さすがに

医者を目指すべく強い意志と学力もなく、緻密に問題を解く数学が好きなことから理系を、そして、もの作りが好きなことから、建築を志望した。共通一次試験の結果を睨み、建築で行けば負ける、建設工学で行けば勝てる、と踏み、志望を転じかろうじて合格した。

そこでお会いしたのが、クラス担任であり、卒業研究の指導教官である東原紘道先生(元東大地震研究所教授、現防災研究所地震防災フロンティア研究センター長)である。オリエンテーションでの開口一番、「建築と違って入った者はすぐに辞めた方がいい」。

先生のハスキーな声でのこの一言と、鋭く大きな眼

ふたりの恩師

株式会社日本構造橋梁研究所

設計部 次長 花島 崇

差しが私の心を挿んだ。当時、建設工学はまだ新しく、建築との違いすらわからずに入學してくる者がいた。とはいえ、やっとの思いで得た入学切符をそうやすやすと手放せるわけがない。

建設が、土木がどんなものか知ってからでも決断は遅くはないと考えた。さて、数か月が過ぎてみると、なんとおもしろい！

話など、工学はもとより歴史、宗教、文学、古典と幅広いお話しであった。学生の中には講義を録音し、コレクションしていた者がいたほどである。中でも庄巻は、フリーエやらグリーンやらの数学者をまるで友達のように話し、さりげなく積分方程式を解いていく姿に何度も圧倒された。

そしてデカイ！ 建築のようなマッチ箱とは違う！と夢中になり始めた(とはいえ、勉強だけでなく浮世の雑事にも興味をもち、のちに留年する羽目になってしまおうが...)。

先生の授業は、当時御自身が関わられた建設中の本州四国連絡橋の吊橋の話や、来島海峡の村上水軍の

橋の仕事を就いてから25年近く経つが、二人の恩師を思い出すと、まだまだ当時の両先生の足元にも全く及ばないことを恥じ、また明日から自分に鞭を入れ頑張ろうと気が引き締まる次第である。

先生の道が拓けた。田島先生の授業では、先生ご自身が撮られた美しい

次回回は、私の橋梁デザイナーの先生である竹内きょうさんにお願います。